

パネル ④

「御影丸」の全容

【昭和 37 年撮影】



門司港沖、浮標（ブイ）に係留中の「御影丸」。

（「御影丸」：総トン数2,751吨 乗組員38人、台湾高雄から砂糖を積載し、荷下ろしのため関門港へ入港した貨物船）

この写真の添え書きには、「船橋（ブリッジ）上部に、『我、目下検疫停船中』の旗を掲揚」と記されている。

パネル ⑤

細菌検査室の様子

【昭和 37 年撮影】



「御影丸」コレラ患者発生に伴い、日夜、検査業務に追われる
検疫所（技官）職員。

パネル ⑥

患者の移送

【昭和37年撮影】



「御影丸」より検疫艇「きりしま」に乗り移る乗組員。



同検疫艇にて、隔離・停留のため移送される「御影丸」の乗組員。
門司検疫所彦島措置場の栈橋手前。

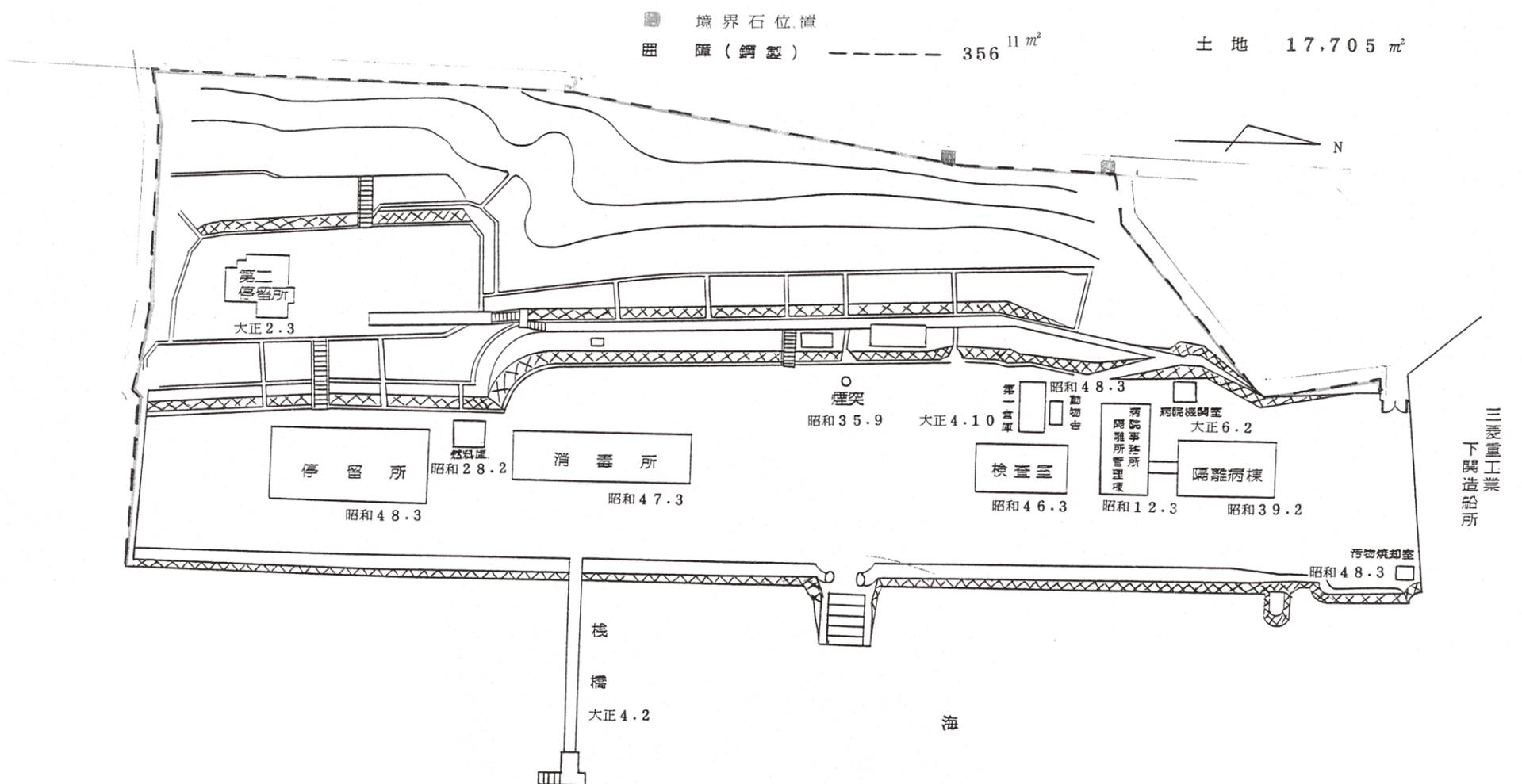
パネル ⑦

彦島措置場全景（昭和50年頃）



敷地中央に位置する煙突がシンボルであった。

彦島措置場建物配置図（縮尺1/800）



パネル ⑧

彦島措置場での様子

【昭和37年撮影】



隔離・停留中の「御影丸」の乗組員。写真は入浴前後。
乗組員の様子を見守る検疫官（後ろ姿）。

【昭和37年撮影】



調理室にて隔離・停留者への食事の準備。

パネル ⑨

隔離・停留の解除

【昭和37年撮影】



昭和37年8月10日、検疫艇「きりしま」で「御影丸」へ帰船する乗組員。

見送る検疫官（後ろ姿）。

【昭和37年撮影】



回復し、元気な様子がかがえる。

パネル ⑩

コレラ検疫 苦勞の数々

コレラ患者の発生により当該船の便所を封鎖、代用に便缶を配置し、定期的にそれを回収。その後、彦島措置場へ移動させ、最終処理を行っていた。写真は、当該船から検疫艇へ便缶を移す様子。



写真は、コレラ患者が乗船していた船の食料・衣類・汚物などを、彦島措置場棧橋から、リヤカーにて汚物焼却室へ運び込む様子。

大変な重労働であった。